

ソロモンの歌
吉田秀和



河出書房新社

ソロモンの歌

© 1970 H. YOSHIDA

一九七〇年十一月十三日発行

著者——吉田秀和

発行者——中島隆之

発行所——株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

電話東京二九二・三七一一（大代表）

振替東京一〇八〇二

印刷——株式会社文弘社

製本——中西製本印刷株式会社

定価——七五〇円

0070-037024-0961

目次

I

中原中也のこと 8

吉田一穂のこと 33

三人——小林秀雄、伊藤整、大岡昇平 63

詩人の運命 79

クレーの跡 93

ソロモンの歌 108

II

時事のおしゃべり 1

136

時事のおしゃべり 2 155

ヨーロッパの若い音楽家たち 175

カール・リヒターとバッハ 185

ルービンシュタイン 195

ベートーヴェン二題 207

ヨーロッパの休日 218

III

荷風を読んで 242

あとがき 307

装幀 野中ユリ

ソロモンの歌

バル
バラ
に



中原中也のこと

1

私は、中原中也の弟子だったわけではない。それに、私は「詩人」についての思い出など、あまり書きたくはない。その理由の第一は、私には、「詩人」というものが非常に特殊な人間に思えるからである。私がこういうのは、特にこの国の詩人が一般に非常に風変りな人たちであり、風変りな文章をかくから、といった理由ではない。むしろ、私が「詩人」について、特別な観念を抱いているからだ、という方が正確だろう。それは偏見かも知れない。しかし、私のその観念は、中原中也を知ったことによって、生れてきたのだ、とはいえる。そういう意味でなら、私は、彼によって、ほかの人からは絶対に経験したことのないあるものを学んだ、といえるかも知れない。彼の存在が、私にあきらかにしてくれたことは、一口でいうと、何億という人間の中には「この宇宙の中

で人間が生きてる」という——簡単といえれば簡単な事実について、ある意味を、突然、私たちが日常生活ではあまり経験しないような形で、啓示できる人間がいる、ということである。私にとっては、以来、「詩人」とは、そういう人間を指す言葉になった。私は「宇宙の中で」と書いた。「自然」という方が通りがいいかも知れない。あるいは、この言葉の方が、もっとびったりする詩人もいるだろう。しかし、中原の場合は、やはり、「自然」では、私にはびったりしないのだ。それにしても、中原の話すのをきいてると、突然すべてのことの意味がはっきりしてくるような印象をうけ、自分がふだんどんなに浅薄にしか生きてないか、思い知らされるような気が、よくしたものだ。

ところで、私が詩人の思い出を書きたくない理由の第二は、「思い出」というものが、元来、実に奇妙な、いや、奇怪なものだからで、「思い出」を書くことと、「思い出す」ことは、かならずしも一致しない。小林秀雄がどこかに書いていたが『上手に思い出すことは、むずかしい』。ことに、詩人についての思い出は、上手にやるのでなくては、単に正確、不正確というだけでなしに、まるで意味がなくなってしまう。それに中原という詩人を思い出すことは、私には何かとても不気味な仕事なのだ。先日から、この原稿のことで少しづつ考えていたら、私はだんだん気味が悪くなってきた、正直な話。私はいま、思

いあたったような気がしているところである。

2

私は、そのころ、まだ高等学校の学生になったばかりだった。私は東京生れだが、小学校の終りに一家とともに北海道の小樽に移り、その中学を四年やって、東京に出てきた。高校は成城。昭和五年のことだから、もちろん旧制当時の話だ。

入学して一学期は寮にいたが、その秋から、阿部六郎先生のお宅に下宿した。阿部先生——私たちは阿部ちゃんとか阿部さんとか呼んでた——はドイツ語の先生で、私としては成城以来、先年、先生が亡くなられるまで、ずっと「偉い先生」として尊敬してきた。

当時、先生は成城町の南側、市河三喜さんの借家に住んでいたが、私は同級生といっしょに一度上ってから、どうしても、この先生のところで暮したくなってしまうのだ。先生は、何事につけても消極的で受け身な一面があつて、この突っ飛なお願ひには、ずいぶん驚きもし、迷惑にも思われたにちがいないのに、奥さんと相談して承諾して下さった。思えば、この奥さんにも、私はひどく御世話になったものである。

阿部さんのお宅は、箱みたいな、上下同じ広さの木造二階建て。その二階の広い方の

部屋が先生の書斎で、隣りの四畳半だったが、私の部屋ということになった。

移ってつぎの日曜の午後、隣りに人がきて、夜になるまで話し声がしていた。その声は少し囁れて低かった。一しきりしゃべったあとで、二人は出ていった。つぎの日曜にも同じ人がきた。話し声は、もっぱら訪問者のそれで、阿部さんの声はほとんど聞えない。これは、別に不思議でも何でもない。阿部先生ときたら、我々がお邪魔して、夕方から夜おそくまでねばりにねばって青くさい議論をしていても、まるで黙りこくったまま、バットばかり立てつづけにふかしていたものだ。机に横向きにかえた椅子の上に座蒲団をしいて(張った布が切れてマットが顔を出してしまったからである)、その上に正座したなり、こちらの話をきいてるのか、きいてないのか。とにかく私は、一生、あんなに相手にしゃべらせ放しにしゃべらせる人に、二度と会ったことがない。私の友人は『あの人は海綿みたいに何でも吸いとってしまう』といったが、何も吸いとられるほどのこともいえない私に対しても、こうだった。ただ、あの人の前だと、やたらと話がしたくなり、しかも、ふだんはっきり考えてたわけでもない考えが、急に形をとって出てくるのだ。先生は反駁も、もちろん、しない。ただ時々、前歯のかけた口をあけて、くすぐったそうに笑ったつけ。

二回目の日曜は、しかし、夕食ですよと呼ばれて、私がしたの茶の間においてゆく

と、この規則正しい訪問者（中原は、人を訪ねるのを日課みたいにしてる男だったが、このごろは日曜というと、阿部さんのところに、まるで学校にでも出るように、きちんとやってくるのだった）もすでに坐っていて、いっしょに食事をした。背が低く、角ばった顔。ことに顎が小さいのが目についた。色白の皮膚には、ニキビの跡の凸凹がたくさんあったが、そのくせ油いどころか、妙にカサカサして艶がわるかった。ぎょろつとした目は黒くて、よく光った。私はそれをみんな一目でみたわけではない。これは、その後の印象のいくつかを足したものだ。初対面では、むしろ、低いが優しい口のきき方と、私のいうことを、そのまま正直に、まっすぐうけとろうという態度が印象的だった。もう一度断っておくが、私は十七歳の高校一年生。生意気で、自分のいうことを、そのまま聞いてる相手なんて、かえって気づまりに感じてしまう年頃だった。年譜で見ると、彼は当時二十二歳。当時の私は、もちろん、他人の年齢の重さを計るはかりを全然もたない年だったが、それにしても、中原は、こんな若さで人生の遍歴をあらかたすごしてしまったみたいなの口をきき方をした。彼は早熟児だったのだろうか。いや、ちがう。事実、彼には、妙にませてたところと、未熟なところが同居していた。私に言わせれば、彼は、たとえば私なんかより無限に年上の人間だったと同時に、非常に infantile な、つまり乳臭い人間だったのだ。これは、私がたとえ当時三十歳であっても、同じだ

ったろう。いや、今後何年生きのびられたって、私は、彼の智慧には及ぶまい。と同時に彼はまるで子供だった。彼の書いたものをみればよい。あんなに幼稚と老成が隣りあつてゐる文章をかつて人間が、ほかにいるだろうか。結果的にいえば、彼には、二十二歳にしてすでにあと七年の生命しか残されてなかつた。そうして、その七年に、彼は変つたろうか？ 少くとも本質的な事件は、ただひとつ。彼が自分の子の誕生と死にたちあつたということだけだ。そうして、その子は、つまり彼自身だった。

3

中原が、その晩どんなことを話したか、それを具体的にいうことは、私の手にはとてもおえない。それを伝える最上のものは、彼の散文だろうか？ 本来はそうなのだが、話、つまり会話とまでゆかなくとも座談には、いつも相手がいるわけだし、その相手が、彼をしばしば苛立たせた。中原は、大變倫理的な人間だった。私はのちに、『論語』をよんで、『人の生くるは直ければなり』という句に接して、これは中原の信念と同じだと思つた。この『直し』というのは、正義とか真理とかいうのとは、ちよつとちがう。本居宣長の言う『清く明るい心』にずっとちがひ。それは、対外的、対人的であるよりも、まず、内的なものあり方についてである。

かくは悲しく生きん世に、なが心

かたくなにしてあらしめな。

われはわが、したしきにはあらんとねがへば

なが心、かたくなにしてあらしめな。

こういった時、彼はヴェルレーヌに近いのと同じくらい、古代中国の聖哲にも近かった。

けれども中原には、その『直さ』が必ずしも、単純にそこにある、といったものでもなかった。いつだったかも、彼は阿部さんの家で、『ああ、俺は赤ん坊になっちゃった！』と叫びながら、急に畳の上に仰向けにひっくりかえってしまって、亀の子みたい、手足をばたばたさせていた。いつもは蒼白な顔色が真赤だった。阿部さんは、例によって黙っているし、敬虔なカトリックで、見るからに聖女みたいな色白丸顔の奥さんは、目を細めて笑っている。その光景は、私には、何ともいえず、おかしくって不気味だった。中原は、しかし、そうだったまますいぶん長くいた。正気の沙汰じゃないといえば、それまでだが、私は今でもやっぱり、彼はあの時、本当に赤ん坊になってしまったのだと思っている。

そういう彼が、また、喧嘩をするとすさまじかった。私のいうのは口喧嘩である。目